

# つなぐ／つながる TUFs ジェンダー・フェミニズム研究連続シンポジウム小特集 イントロダクション

## An Introduction to the Serial Symposium: Gender/Feminism Studies in TUFs

潮屋 郁也  
SHIOYA Ikuya

東京外国語大学大学院博士後期課程  
Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral student

キーワード  
ジェンダー研究 フェミニズム

Keywords  
Gender studies; Feminism

*Quadrante*, No.24 (2022), pp.87–88.

この小特集は、東京外国語大学海外事情研究所主催「つなぐ／つながる TUFs ジェンダー・フェミニズム研究連続シンポジウム」第一回と第二回の報告集である。それぞれ第一回は「これだけは知っておこう 留学／フィールドワークのリスクマネジメント」というテーマで、第二回は「TUFs ジェンダー研究の<sup>いま</sup>現在」というテーマで、シンポジウムを行った。本学の教員や関心と同じくする学生団体や本学職員、外部から招聘した専門家などさまざまな立場から当該テーマに関する報告を行ってもらい、会場での質疑応答を含む議論を踏まえたうえで、報告者の方々にはご自身の報告を原稿にいただいた。

もともとこの企画は、潮屋が大学院生として先生方や他の学生や大学院生とたわいもない会話をしているときに思いついたものである。シンポジウムにもご登壇していただいた金富子先生からジェンダー論の授業の需要がかなりあると聞いて、ジェンダー論に対する関心の高まり（以前から高いとは思いますが）を感じた。そこで東京外国語大学に在籍している学生・大学院

生にとってより身近な問題や関心に直接関わるようなシンポジウムを開催することで、よりジェンダー論に興味をもつことの一助となるのではないか。それぞれの関心に引き付けたいと、身近な事例から関心が広がっていき、この社会について考えることの、最終的にはこの社会を変えていくことの一助となるのではないか。「つなぐ／つながる」という言葉を使用した意図の一端はここにある。

第一回は、第一部「留学／フィールドワーク時におこった／おこりうること」と第二部「心身のことを知ろう、守ろう、そなえよう」の両方で、性暴力やその被害事例、安全対策などについての報告をいただき、議論した。第一部は、外大生の多くが経験するであろう留学に焦点を当てた内容になっている。第二部では、よしの女性診療所で実際に被害事例を直接目にしてきた吉野一枝先生をお招きして、被害事例だけでなく、女性の身体に注目したご報告をしていただいた。

第二回は、学部や学問分野の垣根をこえ、ジェンダーという視点を獲得することにより、ど



のような研究が可能となるのか、どのような新たな論点が浮上するのかについて、ご自身の研究や経験を通したご報告を先生方をお願いした。東京外国語大学は、国際社会学部、言語文化学部、国際日本学部の3つの学部を有しており、学生のもつさまざまな関心にこたえているが、自分が所属していない学部の先生方が何をしているか分からないという声を聞いたことがあった。確かに国際社会学部に所属していた自分も他学部の方のことをよく知らなかったなと思い出し、第二回のシンポジウムをこの垣根をこえるイベントにしたいと考え、言語文化学部所属している西岡あかね先生、国際社会学部所属している金富子先生、小田原琳先生に報告をお願いした。第一回も第二回も、それぞれのご報告は、この社会においてジェンダー（差別）がどのように稼働しているのかという点を改めて考えさせられる内容になっている。

この連続シンポジウムを企画・開催するにあたって、潮屋の企画に賛同し主催を引き受けてくださった海外事情研究所のみなさま、第一回の企画・立案をともに行ってくくださった椎野若菜先生（本学教員）、企画に賛同しご報告していただいた小松謙一郎さん（留学支援共同利用センター）、ポスター作成にもご協力いただいた SAYNO! の方々、お忙しいところご協力いただいた吉野一枝先生（よしの女性診療所）、企画に関して助言をくださりご登壇もしていただいた金富子先生（本学教員）、企画に賛同してくださり、またご報告を引き受けてくださった西岡あかね先生（本学教員）、企画の概要や内容の相談に応じてくださり、ご登壇していただいた小田原琳先生（本学教員）にはここで改めて感謝の意を表したい。